
告白

検体番号10032

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白

【Nコード】

N0124R

【作者名】

検体番号10032

【あらすじ】

“好き”と思うことは簡単だ。
大切なのは“好き”を伝えること。
あなたには、できますか？

季節は秋。公園沿いの道を歩けば一面が紅葉に包まれているこの季節を、特別嫌う人間もないだろう。

俺、山城優司やましろうじも秋は嫌いじゃない。高校二年となった今では紅葉にはしゃぐこともなく、過ぎ行く季節に感慨を覚えることもない。要するにどうでもいいのだ。

そんな、心底どうでもいいと思っていた秋のとある日。

「好きです！ 私と付き合ってくださいっ！！」

俺は、告白された。

告白してきたのは俺の知り合いで、中学で知り合って以来ずっと同じクラスの奴。名前を、水戸奏みとかなでという。元々が明るく活発な性格の奴なので、告白に対して恥じらいなどもないのだろう。周りに聞こえることすらお構いなしといった大声がそれを物語っている。また、告白の時のお約束だと思っていたような照れた様子も見受けられない。

さて、本来ならここで「こちらこそよろしく」とか「悪い、他に好きな人が」とかいう昔から伝わる由緒ある返答をするべきなんだろうが、俺の口から出る言葉はそういった類からは縁遠いものだった。

「もう少し考えて告白したほうがいいと思うぞ」

別にこれは、奏を嫌っているから言っているという訳ではない。
言う相手を考えろという意味でも、何でお前なんか俺にという意
味でもない。

もっと根本的な部分を指摘していたいわけだ、俺は。

「どこの世界に朝っぱらから、しかも教室のど真ん中で告白をする
女子生徒がいるんだ」

そう、事であろうに奏は“朝のHRが始まる直前の教室”で告白
をかましたのである。

唐突に教室に来て、俺に向かい合ったと思ったら告白された。た
いした度胸だ。いや、奏の場合、考えなしなだけか。

「ここにいるよ？」

「きょんとした表情で小首を傾げるな。お前以外いないという意
味で言ったんだ」

「えへへ、褒められた♪」

なんて純粋な子なんだろう、涙が出てきた。

「良いか奏。普通の一般的な告白というのはな、どこか屋上のような
場所でひっそり行うものなんだ」

「ほえ、そうなの？」

「ああ。それに、朝よりは放課後が多いな」

「なるほどお……」

奏は顎に手を当て、名探偵が推理する時のポーズをとっている。だけどな奏、それはもつと頭のいい人間がするべきポーズなんだ。お前がそうそうとれるようなポーズじゃないんだぞ。

奏は昔から頭が弱い。“思い立ったら即行動”を地で行く人間は奏を除いて見た記憶がない。元々深く考えるタイプの人間ではないため、ほとんどの行動が洗練された感性によるものだ。おそらくだが、今回の告白もその類だろう。

キンコンカンカーン――

いつの間にか時間は過ぎ、HRの開始時刻になっていたようだ。そしてチャイムが鳴り終わり、担任が教室に現れる。ひとまず俺は奏を自分の席へと帰るように促し、俺と奏は席に着く。

担任の話は数十秒で終わり、後は休憩時間となった。その際、周りの連中から告白についての問い詰めが殺到した。だるかったので適当な返事を述べた後、即座に屋上へと逃げ込んだ。

我が校の屋上は至って簡素で、ただの開かれた空間でしかない。適度に誰かが掃除でもしているのか、石でできた床には埃ひとつない。

俺はそこに腰を下ろし、手を頭に添えたまま寝転がる。見上げた空はうんざりするほど青く、雲ひとつなかった。そんな気持ちのいい空の下、俺の心は一向に晴れる気配はなく曇天に包まれていた。

「はぁ……だりいなぁ」

教室に帰った時のことを思うと、自然にため息が漏れた。ごまかすことは簡単だが、それを信じ込むとは思えない。野次馬に徹するような連中は、自分の求める答え以外は受け付けないからだ。

「……」

そしてふと、考え込む。当然それは、奏の告白について。なんだかんだで3年以上の付き合いだ、奏の性格はよく理解している。

奏は、決して嘘を言わない

頭が弱い分、あれこれ考えるのが苦手な奴だ。オブラートに包むこともせず、自分の思いをそのまま直球で投げってくる。よく言えば正直者、悪く言えば馬鹿な奴だ。

そう考えるとあの告白も…本気、なのだろう。

「奏が、ねえ……」

とはいえ、まだ奏の真意は分からない。

俺は会った当初から奏をそういう対象で見たことはないし、奏もそうだと思っていた。実際にそれらしい素振りを見せていなかったし、言い出すこともなかった。俺たちの関係は、彼氏彼女というよりは、兄妹のような関係だと感じていたからだ。

そんな奏が、俺に好きだと言った。
友情ではなく、愛情の意味で。

「……」

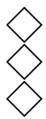
俺はまた、考える。今度は自分について。

奏の事は嫌いではなく、当然好きだ。ただそれが友情なのか、妹に向ける情なのか、はたまた愛情なのかは分からない。そうだと言われればそうだと思うし、違うと言われれば違うと思う。そんな、不確かな感情。

(どう、なんだろうな……)

俺は、奏の事が好きなのか？

晴天に続く青色が、妙に腹立たしかった。



「ゆーじ、起きなよ」

「ん、む……?」

体を感じる小さな揺れと共に声が聞こえた、それも真上から。中々に強い眠気に対抗しつつ薄目を開くと、そこには奏の顔があった。どうやらしゃがみこみ、真上から俺の顔を覗き込んでいるようだ。

「今……何時、だ?」

「12時」

「ぴったりか?」

「ううん、12分19秒」

「昼休憩か」

奏の言葉を信じるならば、午前中は丸々寝ていたらしい。やっぱり長考は性に合わないな。寝転んだまま寝てしまうとは。

「というか奏、何でお前がここに?」

「起こしにきたの」

「……なるほど」

俺は奏に気づかれないように、静かに嘆息した。

「ねえゆーじ」

「ん？」

「わたしはゆーじの事が好きです。付き合ってください」

また告白された。

「……物事にはタイミングというものがあるだろうに」

頭に手を当てながらまた嘆息する。朝といい今といい、奏の頭の中には“雰囲気”という単語はないらしい。寝起きの人間に告白した奴など、奏ぐらいのもんだろう。

「もう少し場を考えたほうがいいな、奏」

「……」

そう言って立ち上がり、弁当を取りに屋上の出入り口に向かう。空腹感がそこそこに大きくなってきているし、奏の近くに弁当がおかれていたから奏もまだなのだろう。少し急いだほうがいいかもな。

「むお？」

そんなことを考えていると、口から変な言葉が漏れてしまった。俺は驚き、声の原因となったそれを見る。

奏が、俺の制服の裾をつかんでいた。

しかしそこには、いつものような活発さは見受けられない。指先で軽くつままれたそれは、いとも簡単に振りほどくことができるだろう。

奏は顔をうつむかせており、俺からじゃあその表情はうかがえない。今までにない雰囲気奏はまottoっており、俺は下手に動こうという気すら起きなかった。

「……じゃあ……」

俺の耳が、消え入りそうな奏の声を聞き取る。

俺の目が、顔をこちらに向けた奏の顔を捉える。

その顔を見た瞬間、俺の現実味は一気に無くなってしまった。

なんで、なんでだ

俺の目の前にいるのは、奏だろう

いつもの奏のはずだ

活発で少し頭の弱い、俺のよく知る奏のはずだ

なら、なんで……

「わたしは……どうすれば、よかったの……？」

なんでそんな、今にも消えてしまいそうな表情で涙を流してるんだ

「うぐっ……ひぐっ……」

時折聞こえる奏の嗚咽が、やけに遠くから聞こえているかのような錯覚を引き起こす。

俺は呆然とし、言葉をかけてやることもできない。

「ゆーじのこと、好きなのに……なんで、なの……？」

奏の“好き”という単語を耳にした瞬間、自分の過ちに気づく。

脳が回転を始め、思考がやけにクリアになる。何で、俺はこんなことにも気づけなかったんだ。当たり前のことだろうに。

奏だって、女の子なんだ

つまり、最初っから奏は本気だったんだ。

今思えば、当然といえば当然か。奏は元々頭が弱いんだ、嘘や冗談なんて扱えるわけがない。第一、告白なんて冗談でするようなものじゃない。だけど俺は、その本気の思いを冗談で踏みにじってしまった。それも二度。

「うっく……えぐっ……」

思考がクリアになったせいかな、奏の嗚咽がはっきりと聞こえてくる。

そして俺は、罪悪感と自責の念で押しつぶされそうになる。

それと同時に俺は気づいた、俺の気持ちに。奏の思いを知って、どれだけ本気なのかを知って、ようやく気づいた。それが出会った時からのものなのか、今までに芽生えたもののかは分からない。でも、今のこの思いが本物だということは分かる。

そうか、俺は……

「奏」

「……ひぐっ」

名前を呼ぶと、返事のかわりに嗚咽が返ってきた。段々と落ち着いてきたようだけど、瞳に溜まった大粒の涙はまだ流れ続けている。目の前の女の子は儂げで、今にも折れそうなほど弱弱しかった。

「……ごめんね」

俺がまず言おうとしたことを、奏に先に言われてしまった。

奏は自分の握っていた裾から手を離し、涙を流しながらも笑って見せた。その笑顔は、俺の見てきた笑顔の中で一番痛々しくて、一番見たくなかった笑顔だ。

「ごめんね、わたしバカだから……タイミングとか場所とか、そういうの全然分からなくて……」

違う。馬鹿なのは俺の方だ。

何も知らないくせに偉そうに色々と言ってしまうような、大馬鹿野郎だ。

「ゆーじの気持ち……考えてなかったね」

違う。それも俺だ。

奏の気持ちも考えないで、好き勝手言ってしまった。

「本当に、ごめん……」

「違う!!」

気づけば俺は叫んでいた。そう、違うんだ奏。謝るのは俺の方だ。

いつもなら「こんなの俺のキャラじゃない」とか言いそうなものだ。色んな事がどうでもいいってのが俺の基本スタンスだから。でも、今はそんなの関係ない。男には、格好悪くても、伝えなきゃならない時ってのがある。それが今だ

「奏」

「……なに？」

不意に叫んだからか、奏は少し萎縮しているようだ。

「……」

「……ゆーじ？」

いざ言葉にしようと思うと、喉から出てこない。

畜生、これってこんなに緊張するものなのか。改めて奏の凄さを知った。

でも、乗り越えなければいけない。

言わなければいけない言葉がある。

伝えなければいけない思いがある。

なら、ここで頑張るしかないだろう。

伝えるんだ

俺の気持ちを

俺の、本当の気持ち

「奏」

「なに？」

そして一呼吸おいて、俺は言う。

「俺は……山城優司は、水戸奏のことが……好きだ」

言い切った。



結果として俺と奏は付き合うようになった。

色々と考え、思い、悩んだあの時間は、過ぎてしまえばなんでもなかった。むしろ、恥ずべき黒歴史のように感じられる。

「ゆーじ?」

キョトンとした顔の奏が、俺の顔を覗き込みながら呼びかける。

「ん、ああ悪い。ぼーっとしてた」

今は下校時刻。俺の隣には奏がいて、一緒に下校中だ。

「いいよお、だってゆーじのこと好きだもん♪」

そう言って奏は俺の右手に抱きつく。

心の底から嬉しいと言わんばかりに、心の底から幸せだと言わんばかりに。

「……はいはい」

奏の髪からくる甘い香りにまどろみながら、雰囲気流されないようにと、俺はそっけない返事を返す。

「ゆーじは?」

「ん?」

「ゆーじは、どう？」

奏は朝みたいに、小首を傾げてたずねてくる。

「俺も……」

言おうかはぐらかそうか迷ったけど、昼には悪いことをしたからな。贖罪の意味も含めて言ってる。

「好きだよ、奏」

「うん！ わたしも♪」

昼には鬱陶しく感じた晴天も、今では何にも感じない。奏がいれば、そう思えるようになったから。

(後書き)

どうも、検体番号10032です。

この度はご一読いただき、ありがとうございます。

今回は恋愛をテーマに書いてみました。いかがでしたでしょうか？

感想、ご意見をお待ちしております。今後の参考にしたいと思いますので、よろしくお願いします。メッセージでも構いません。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0124r/>

告白

2011年10月7日03時44分発行